

# 『維摩經』と文殊菩薩

西 野 翠

## はじめに

『維摩經』(*Vimalakīrtinirdeśa*)は従来、主人公・維摩(*Vimalakīrti*)に照準を当て「維摩の經典」とみなされ、維摩と並び立つ重要な役割を担う文殊師利(*Mañjuśrī*)については、「維摩の見舞い役を引き受けた智慧者」として一目置かれはするものの、あくまでも脇役との見方にとどまってきた。しかし、平川(1970)で提示されている以下の仮説に注目するとき、『維摩經』における文殊についても、平川の仮説における文殊教団との関わりにおいて検討する余地があるように思われる。

大乘に出家菩薩の教団ができたとき、彼等は文殊を信仰の中心として崇めたのではないだろうか。…文殊を思想的中心とする教団が存在したように思われる<sup>1)</sup>。

文殊の菩薩としての誕生については、手島(1917, 121-124)や赤沼(1998, 249-250)によると、紀元1世紀前後と想定される。この成立年代からすると、『維摩經』の作者は「文殊法門」の活躍を知っており、そのうえで維摩の対論相手に文殊を割り当てていたと考えられる。本稿では、文殊師利に関連する經典を概観し、文殊菩薩とその教説の特徴を確認し、その結果を踏まえて、『維摩經』における文殊菩薩の役割、また『維摩經』と文殊師利法門<sup>2)</sup>との関係についてみていきたい。

## 1. 文殊師利関連經典と文殊師利法門

赤沼(1998, 251)は仏教經典史の流れの中で文殊師利に関連する經典を取り上げ、「般若の人格化である文殊」との見方を示している。印順(1981, 873-997)は文殊師利関連經典を網羅的に選び出し、「文殊師利法門」の全貌を明らかにしている。また光川(1997, 68-72)は文殊菩薩を経名にもつ經典を一覧し、そのうちの2つの經典(『仏説須真天子經』および『仏説文殊師利現寶藏經』)に基づいて、文殊菩薩の殊勝性を明らかにしている。

印順(1981, 918-920)が取り上げた文殊師利関連經典は、A) 仏が文殊のために

(154)

『維摩經』と文殊菩薩 (西野)

説いているもの (7部), B) 文殊を説主と為すもの, あるいは問答に一部参加するもの (28部), C) 問答に一, 二節のみ参加しているもの (12部) の47部で, そのうちのBが「文殊師利法門」の根拠とされ, 『維摩經』もここに分類される。

光川 (1997, 41-45) は經名による分類で, A) 經名に文殊師利と明記されているもの (20部), B) 經典の別称に文殊の名があるもの (8部), C) チベット訳されているものの經名から文殊関連とみられるもの (2部) の30部を挙げている。弥勒や阿弥陀の関連する經典と比較して, 文殊関連經典はその数が圧倒的に多いことが特徴であり, この数の多さからみても, 初期大乘における文殊法門の地位がうかがい知れよう。

文殊系經典にみる文殊菩薩のすがた 望月 (1930), 印順 (1981), 光川 (1990) などの先行研究によって浮上してくる文殊の基本的なすがたとして, 以下の諸点が挙げられる。

- ・文殊は東方世界の菩薩であり, 釈尊との感応道交によって, 衆生救済のために娑婆世界に来ている。
- ・文殊は般若の説者であり, 文殊と般若は必ず不離の關係に置かれる。
- ・般若波羅蜜は諸仏の母であり, 文殊菩薩は「一切諸仏の母」と呼ばれる。
- ・文殊は出家菩薩であり, 釈迦牟尼仏陀の代理人ともいえる菩薩である。

文殊法門の教風 初期大乘において, 「文殊法門」は「般若法門」と源は同じで, 説くところも般若空・不二の思想である。しかし, 「般若法門」とは異なった文殊法門独自の教風がみられる。それは「相手に反観・反詰あるいは否定を促す言語表現」「聴衆を面食らわせるような常軌を逸した行動」などである。

また, 文殊法門の思想面での特徴を要約すると, 1) 勝義諦を重視し, 世俗諦を重んじない, 2) 尋常でない発言 (際立った反語的表現) と常軌を逸した行為, 3) 天子に対する説法, 4) 多くの他方仏土・他方仏を伝えるが, 釈尊の穢土を重視, 5) 仏・菩薩の方便行, 6) 「法界」を特に重んじる, 7) 「諸法是菩提」「不断煩惱」「煩惱是菩提」「五逆是菩提」の思想, 8) 弾偏・斥小, 9) 女性の説法, 10) 仏・仏土・衆生・法の平等, などが挙げられる<sup>3)</sup>。このうち, 1), 5), 7), 8), 9) は『維摩經』と共通する特徴である。

## 2. 『維摩經』における文殊菩薩

望月 (1930, 61-62) は, 「諸法皆空の般若の説は阿含仏教に対する改革運動であり, 維摩は般若の迹に至りて編述された」との見解を示しているが, 維摩と文殊

法門の先後について、經典の記述自体に基づいて推測すれば、『維摩經』は文殊系經典が流布した後に作られたと考えられる。なぜなら、維摩が如何に勝れた人物であるかについての説明は「方便品第二」、つづく「弟子品第三・菩薩品第四」において延々と続くのに対し、文殊菩薩については何らの説明もないまま、維摩を見舞う場面に展開しており、文殊については説明不要の状況にあったとみられるからである。

「対話者」としての文殊の手腕 「大乘經典における文殊師利の役割」として Tribe (1997) は5点挙げている。その第1が「対話者および代弁者」という役割であり、それが最もはっきりした形でみられる經典として『維摩經』が挙げられている。『維摩經』において文殊が登場するのは「問疾品第五」から「入不二法門品第九」までで、その間に文殊は30余の問いを投げかけ、その問いに導かれて維摩の説法が順々と引き出されていく。つまり『維摩經』の最重要部分である維摩の説法は文殊との対話によって成り立っている。

『維摩經』における文殊の説法 もっぱら文殊が問い維摩が答えるという流れにおいて、維摩が文殊に質問している場面が幾つかある。例えば「仏道品第八」では、「如来の家系とは如何なるものか」と維摩が問い、文殊が「如来の家系とは無明と有愛である」を筆頭に、貪瞋痴（三毒）、四種の顛倒（四顛倒）などを「如来の家系」として挙げ、その問答の中で、「汚泥の蓮華」の比喩も語られている。

「入不二法門品第九」では、菩薩たちに対して発せられた「不二の法門に入るとは如何なることか」という維摩の問いに、文殊も答えている。「一切諸法は不可受、不可説、無言説、不説、離言説、非仮立である。それが不二に入ること」というその回答によって、かの有名な「維摩の黙」が引き出されている。

『維摩經』における維摩と文殊の関係——協働者 上述の如く『維摩經』における文殊の役割をみてくると、「維摩が主人公で、文殊はその引き立て役」という単純な構図は必ずしも正しくないことが分かる。では、經典作者は、維摩と文殊をどのような関係に描こうとしていたのか。「香積仏品第十」では、衆香国の食べ物に誘われて集まっていた満八万四千のリッチャヴィの人々に向かって、「維摩と文殊は、満千の生類が無上正等菩提に発心するように、そのように法を示し、一万の菩薩たちも無生法忍を得た」と説かれており、維摩と文殊は共に法を説き示す「協働者」として捉えられている。

(156)

『維摩經』と文殊菩薩（西野）

### 3. 文殊師利法門と『維摩經』

『維摩經』と文殊經典とは、思想的な類似性はもちろんだが、挿入されたプロットにも共通する点が多い。具体的な類似点および相違点を通して、文殊師利法門に対する『維摩經』の位置づけを考えてみたい。

文殊系經典と『維摩經』の類似点 細かに検討すれば数多くの類似性が挙げられるが、ここでは3点のみ指摘したい。

- 1) 「抑小揚大」の傾向：維摩が十大弟子を詰ったと同じように、『魔逆經』では六大弟子、『離垢施女經』では八大弟子、『首楞嚴三昧經』では九大弟子、『須真天子經』では十四大弟子がやり込められる。
- 2) 阿闍世ととの関係：維摩は阿闍世の妙喜世界から穢土に来ているが、『首楞嚴三昧經』の現意天子は首楞嚴三昧を説くために穢土に来生しており、『文殊師利土嚴淨經』の棄惡菩薩が仏となったときの世界は阿闍世如来の世界と同じだといわれる。
- 3) 男女不二・転女身説：『維摩經』では、舎利弗と天女の間答が有名である。『首楞嚴三昧經』では瞿曇天子が、「大乘を發すものは男女の別を見ない」と述べている。また『諸仏要集經』にも同様の逸話があり、その類似性は「もはや…単なる偶然と見ることは不可能となる」<sup>4)</sup> というほどである。

このような類似性に照らして、『維摩經』と文殊系經典ないし文殊師利法門との間に緊密な関係性があったことは間違いないと思われる。

『維摩經』と文殊系經典との相違点 維摩は「衆生たちを清浄にするために、敢えて不浄な世界（穢土）に生まれている」（見阿闍世品第十二）が、その点は文殊も同様であり、両者とも齊しく衆生教化に邁進している。しかし、両者の教導方法は異なる。維摩は「方便善巧の人」であり、衆生の機根・能力にあわせて種々の方便を講じ、文字どおり衆生に「近づく、到達する」(upa-√i ⇒ upāya, 方便) ことを旨とする。他方、文殊は相手の如何によらず飽くまでも甚深なる法をもって迫る。

また、文殊と維摩には「菩薩としてのあり方」においても相違がみられる。「菩薩がどこで、いつ、どの仏陀の前で菩提心を發し、誓願を立て、自分の未来の仏国土を飾るための特性を決めたか、そしていつ無上正等覺に達するか」という極めて重要なテーマが、文殊に関しては詳しく述べられているが、維摩についてはまったく明かされていない。Lamotte (1976) はその理由の一つとして、「維摩が大乗の聖者伝の中で比較的目立たない地位を占めていること」<sup>5)</sup> を挙げている。た

しかに、後期密教に至って *Tantric god*<sup>6)</sup>とも呼ばれる偉大な存在となる文殊とは対照的に、維摩は維摩系諸經典<sup>7)</sup>でみてもさしたる活躍がみられず、なかにはまことに冴えない役柄を演じている場合さえある<sup>8)</sup>。

文殊法門から『維摩經』へ 文殊の教説には聴衆を震え上がらせる激しさがあつた。それについて印順(1981, 939)は、「強い薬を用い、毒を以て毒を制するのはみな治病の良法だが、このようでありさえすれば病を治せるというものではない。…そのため文殊法門の特徴といえる常軌を逸した言動は衰落してゆき、中国禪宗の祖師のあいだに若干ながらその傾向が残った」と述べている。

これは、赤沼(1998, 263)が導き出した結論、すなわち「文殊は弥勒の後に顕れて、漸次に弥勒の地位を奪い、放鉢經、法華經序品等明らかにこれを示している。かくて弥勒をしのいだ文殊は維摩經の維摩、入法界品の普賢にその地位を譲ろうとしている」に通じる。

## おわりに

文殊法門の後に登場した『維摩經』の文殊師利法門に対する立場について、「文殊は阿含に反旗を翻し、釈尊の対機説法で教化を図る般若にも異を唱え、嚴重に勝義諦を貫いた。そこに維摩が登場し、巧みな方便を駆使して衆生を導き、沈黙を以て〈不二の法門〉の深義を示した」といえよう。

文殊も維摩も共に空の立場から衆生済度に取り組み大乘を称揚するが、文殊の声聞攻撃には声聞仏教界の大乘誹謗を挑発する畏れが懸念されるほどに激しいものであつた。他方、『維摩經』は対立を超える姿勢を鮮明にしており、それは維摩の家の天女の科白、「声聞乗を説けば声聞乗、縁起の法に入れば独覚乗、大悲を捨てなければ大乘」(觀衆生品第七)にも読み取れる。「勝義諦一辺倒」とみなされる文殊と「方便善巧の達者」たる維摩とが並び立つ『維摩經』には、初期大乘仏教の遷移の一面が映し出されているのではないだろうか。(紙幅の関係で、脚注および参考文献の大半を省いた。)

1) 平川 1970, 581 参照。

2) 高崎直道・河村孝照校註『新国訳大蔵經 文殊經典部 2』(大蔵出版, 1993)の編纂に当たって、高崎は文殊菩薩との関連性から『維摩經』と『首楞嚴三昧經』をはじめとする諸經典(『思益梵天所問經』, 『大方廣宝篋經』, 『阿闍世王經』, 『文殊師利淨律經』, 『文殊師利般涅槃經』, 『伽耶山頂經』, 『文殊師利問經』, および『未生冤經』)を合わせて、「文殊經典」という部類を別出している。

## (158) 『維摩経』と文殊菩薩（西野）

- 3) 印順 1981, 928-944 を参照.
- 4) 『国訳一切経』（印度撰述部・経集部 14, 大東出版社, 1973）, (63)-(65) における泉芳璟の「諸仏要集経解題」を参照.
- 5) Lamotte 1976, civ を参照.
- 6) Hastings 1916, 405.
- 7) 『維摩経』三漢訳（T nos. 474, 475, 476）とその後に続く T no. 477 『仏説大方等頂王経』, T no. 478 『大乘頂王経』, T no. 479 『善思童子経』, T no. 480 『仏説月上女経』を指す. 大鹿（1985）はこのうち『善思童子経』, 『月上女経』と『維摩詰所説経』の三本を「ヴィマラ・シリーズ」とし, 特に『月上女経』と『維摩経』の類似性を比較している. 参照: 西野（2010）, (179)-(182).
- 8) 『月上女経』では毘摩羅詰は平凡な長者であり, その娘が常人ならざる月上女である. 月上女を妻に求めて大勢の男たちがやって来ると, 毘摩羅詰は恐怖のあまりに泣き出して, 娘に諭されるという不甲斐なさである.

## 〈参考文献〉

- 赤沼智善 1998 『赤沼智善著作選集 第三卷 仏教経典史論』 うしお書店.
- 印順 1981 『初期大乘仏教之起源与開展』 正聞出版社.
- 大鹿實秋 1985 「月上女経と維摩経」『維摩経の研究』 平楽寺書店, 561-581.
- 手島文倉 1917 「文殊思想発展論」『宗教研究』 2 (6): 113-150.
- 西野翠 2010 「維摩の家族——維摩グループ諸経典を踏まえて——」『印度学仏教学研究』 57 (1): (179)-(184).
- 平川彰 1970 「大乘仏教の興起と文殊菩薩」『印度学仏教学研究』 18 (2): 580-593.
- 光川豊藝 1990 「文殊菩薩とその仏国土——『文殊師利仏土厳浄経』を中心に——」『仏教学研究』 45/46: 1-32.
- 光川豊藝 1997 「文殊師利菩薩『所説経』の研究——文殊の説く教説と神変を中心に——」『龍谷大学論集』 450: 41-76.
- 望月信亨 1930 『浄土教の起源及発達』 共立社.
- Hastings, James, ed. 1916. *Encyclopædia of Religion and Ethics*. Vol. VIII. New York: Charles Scribner's Sons.
- Lamotte, Étienne, trans. 1976. *The Teaching of Vimalakīrti (Vimalakīrtinirdeśa)*. Translated by Sara Boin-Webb. London: PTS. Originally published as *L'Enseignement de Vimalakīrti (Vimalakīrtinirdeśa)*. Bibliothèque du Muséon 51 (Louvain: Publications Universitaires, 1962).
- Tribe, Anthony. 1997. "Manjusri: Origins, Role and Significance (Parts I & II)." *Western Buddhist Review* 2. [http://www.westernbuddhistreview.com/vol2/manjusri\\_parts\\_1\\_and\\_2.html](http://www.westernbuddhistreview.com/vol2/manjusri_parts_1_and_2.html) (2015/9/29 現在)

〈キーワード〉 『維摩経』, 維摩詰, 文殊菩薩, 文殊系経典, 文殊師利法門

(大正大学総合佛教研究所研究員)